【第 35 回オンコロジーセミナー】　Ⅲ.パネルディスカッション　演題要旨

① 事務の立場から「医療者に寄り添う DX を目指して」
演者：白木 康浩（信州大学医学部附属病院　経営管理課医療情報戦略室）

[演題要旨]
信州大学医学部附属病院では 2018 年より Robotic Process Automation（RPA）を導入し、事務職の業務負荷軽減を図ってきた。2023 年は、これまで医師が行っていた放射線未読レポートのメール通知、薬剤師が行っていた治験管理の温度記録について RPA を適用し、自動化することで医療職の働き方改革にダイレクトにつなげる活動を実施している。このような活動を通して、医療職の業務負荷軽減を果たすためには、デジタル技術に適合した業務フローを再構築することが、今後の事務職員の役割であると強く認識するようになった。本講演では、これまでの取組を紹介するとともに、参加者との忌憚のない意見交換をすることで、医療 DX についてともに考えていきたい。

② 薬剤師の立場から「副作用を適切にモニタリングするために～DX によるがん薬物療法の最適化～」
演者：土屋 雅美（慶應義塾大学　薬学部　医薬品情報学講座）

[演題要旨]
デジタルテクノロジーの進歩により，医療分野においてもデジタルトランスフォーメーション（Dx）が進みつつある．とりわけ，副作用がほぼ必発である抗がん薬の副作用モニタリング等において，Dx に対する期待が高まっている．本講演では，電子カルテやパーソナルヘルスレコード（PHR）などの患者デジタルデータの種類と特徴，データ収集や活用の実際について紹介するとともに，これらのリアルワールドデータを活用した副作用モニタリングの新規手法などについて，実例を交えながら概説する．

③ 看護師の立場から「がん薬物療法における DX～看護師の立場からメリット・デメリット～」
演者：矢野 美穂（国立がん研究センター中央病院）

[演題要旨]
医療のデジタル化により患者さんや医療スタッフの業務効率化や医療の質の向上が期待されている。当院でも一部の診療科でタブレット問診を導入しており、導入により患者さんの負担は軽減し、業務の効率化につながっている。最近では、患者さん自身の携帯アプリによる健康記録を共有、利用することで、セルフケア支援につなげたいと試験的に導入を始めたところである。対象患者さんや看護介入のタイミングを検討することで業務の効率化が期待できると考える。しかしながら、アプリ導入による患者さんの負担、タイムリーに医療者側が確認することが難しいなど課題も多い。当院での取り組みによるメリット・デメリットについて共有し、患者さんに利便性や安全性を理解してもらいながら、どのように日常の業務にとりいれていくことができるか検討していきたいと考える。

④　医師の立場から「がん薬物療法における遠隔医療と分散化臨床試験」
演者：谷口 浩也（愛知県がんセンター 薬物療法部）

[演題要旨]
新型コロナウイルス感染症パンデミックを契機に、感染症、循環器、精神科領域の疾患において、遠隔医療の活用に関する議論が活発化してきた。一方、がん薬物療法では、その疾患の重篤度や治療の特殊性から、遠隔医療の活用に関する議論は深まっていない。我々は、2022 年よりオンライン診療や治験薬被験者宅配送などの DCT 要素を取り入れた完全オンライン治験を開始した。また、日本遠隔医療学会腫瘍内科遠隔医療分科会を立ち上げ、活動を行っている。これらの取り組みの現状を報告するとともに、がん薬物療法における遠隔医療・遠隔治験の課題と将来について議論したい。